「水の作文大賞」

# 水はあたりまえじゃない

熊本大学教育学部附属中学校　二年　森　優佳

水は、いつもあたりまえに身近にあるものだと思っていました。

友達と遊びに行くときでも、自動販売機に水は売ってあります。学校や公園でも蛇口をひねれば水は使うことができます。お風呂もトイレも、温泉、駅などでもいつでも使用できます。水は、あたりまえの存在だと、勝手に思い込んでいました。

それは、小学校一年生の経験によるものでした。修了式も近い、三月十一日のことでした。私はそのとき、生まれて初めて地震を経験しました。しかし、私が住んでいるところは震源とはそこまで近くない群馬県だったため、水道が止まる程の大事はおこりませんでした。だから私は、食べ物やガソリンは全然売ってなくて大変でも、水は地震がきても大丈夫と、思ってしまいました。

そう思い込んでしまうぐらい私にとって水とは身近なものでした。

中学一年生になって、まだ学校生活にも慣れないまま、熊本地震がおこりました。水道も当然のように止まりました。そのときやっと私は「今まで感じてきたあたりまえはあたりまえじゃない。」と気づきました。震源地の近くに住んでいた祖父母は私の家に避難して来ました。飲み物が無くなりそうになったため、私は姉と買いに行くことにしました。しかし、コンビニはもちろん近くの自動販売機はほとんど売り切れとなっていました。少し遠くの自動販売機へ行ってやっと、人数分の飲み物を買うことができました。

地震があって数時間後、大きな問題がでてきました。トイレです。近所の小学校から出た唯一の水は、足洗い場のチョロチョロとしか出ない水でした。だから私は持って来ていたバケツにいっぺんに入れることを諦めて、少ししか出ない水をペットボトルに入れてからバケツ移す、という作業を繰り返しました。そしてやっと一回分のトイレの水をとることができました。

しかし、一日に何回も使用するトイレは、水がもっともっと必要でした。だから水をもらいに行こうと神社を通ると、トイレが無料で開放されていました。溜められていた水で多くの人が利用できるようになっていました。そのため、不自由を感じることなく過ごすことができました。それから数日たってやっと近くの水源で水をとることができました。

この経験で私は、水の必要性と水があたりまえの存在ではないということを学びました。それから私はどのような工夫をすれば水を大切にできるのか、考えるようになりました。そして、皿洗いのときに実行し始めました。油をそのまま流すと、流された油と混ざった水をきれいにするために何倍もの水がいる、という話を聞きました。だからまずお皿の油をきちんとティッシュでふくことをこころがけるようになりました。それから洗剤を洗い流すときはおけにためてからするようにしています。

このような少しずつの節水は未来につながると思います。二つの地震の経験で感じるようになった水の必要性、水はあたりまえのものではないということは、これからに活かせるはずです。水は限りある資源です。そのことをいつも頭のすみにおいて、「使いすぎかな。」とか、「もう少し減らそう。」と思いながら使っていきたいです。